

女子青年界

(復刻版)



本誌は、日本YWCA(日本キリスト教女子青年会)の機関誌として、日露戦争の年に創刊された。爾来四六年間、激動する近代史に女性キリスト者の良心と行動を刻みつづけた、近代女性史・キリスト教史研究に必備の幻の貴重資料！



全三三卷・別冊一

一九〇四(明治三十七)年五月

一九五〇(昭和二十五)年二月

A5・B4判・上製・総二二、八六六ページ

本体揃価格 七四八、〇〇〇円

不二出版

『女子青年界』は、一九〇四(明治三七)年五月、当初は『明治の女子』の誌名で創刊され、翌年日本基督教女子青年会(日本YWCA)の発足とともに、その機関誌として敗戦の前年まで月刊で発行された。日本YWCAは、日本の女性キリスト者の拠点として、津田梅子・河井道子・植村環など近代女性史に大きな足跡を残した女性たちを中心に各地で活動を展開していく。

日本YWCAは、組織自体が一種の教育機関であり、そこでの人格的交わりと実践を通して社会改革に努める女性のリーダーシップを育てようとした。したがってその活動もキリスト教伝道にとどまらず、女性の社会教育を一貫して行なってきた。

女子学生や働く女性のための寄宿舎事業、婦人問題に関する調査・研究、国内外の災害救援、職業婦人の連合会結成、託児所設置などの隣保事業、女工・女中の生活教育などのほかに、またその時々々の問題に敏感に反応するなど、常に女性の人間としての自立を促した。

今回の復刻版刊行にあたっては、敗戦直後に『女子青年界』にかわる機関紙として一九四六年から五〇年まで刊行され、一般紙としても機能し最盛期には発行部数三万部ともなった『女性新聞』全一五八号をも収録した。また新たに「解説・総目次・索引」を作成、付して利用者の便をはかった。

本誌は、これまで日本近代女性史・思想史において等閑視されてきた日本の女性キリスト者の歩みを克明に記録する貴重な資料である。多くの研究機関に備えられることを希望するものである。

不二出版

明の治の子女

女性新聞

女子青年界

『女子青年界』関連年表

- | | |
|----------------------|------------------------------------|
| 一九〇四年 | 『明治の女子』創刊 |
| 一九〇五年 | 日本基督教女子青年会(日本YWCA)委員会発足 |
| 一九一二年 | 東京YWCA発会 |
| 一九一三年 | 本誌、『女子青年界』に改題 |
| 一九一八年 | 横濱YWCA創設 |
| | 大阪YWCA発会 |
| | 東京YWCA、巡回産婆看護婦事業開始 |
| 一九二〇年 | 神戸YWCA発会 |
| 一九二三年 | 京阪神YWCA、BG(職業婦人)クラブ連合集会 |
| | 関東大震災。本部全焼失 |
| 一九二五年 | 月島に隣保事業開始 |
| 一九二七年 | 第一回全国総会 |
| | 亀戸モスリン工場に移動式女学校開設 |
| | 東京YWCA有職婦人クラブ連合集会 |
| 一九三一年 | 労働調査部、女工教育開始 |
| 一九三二年 | 労働調査部、十一月第一週を労働週間とする |
| 一九三三年 | 名古屋YWCA発会 |
| 一九三五年 | 名古屋YWCA友の家事業部、女中慰労会開催 |
| 一九三六年 | 御殿場託児所開設 |
| | 労働研究部、ILO・万国YWCAの依頼で、職業婦人に関する調査を実施 |
| 一九三七年 | 七つの市民的婦人団体と日本婦人団体連盟を結成 |
| 一九四四年 | 『女子青年界』廃刊 |
| 一九四六年 | 『女性新聞』創刊 |
| 一九五〇年 | 『女性新聞』廃刊 |
| 一九五一年 | 月刊機関誌『YWCA』創刊 |
| 『年表 日本YWCA 八〇年史』より作成 | |

内容見本



基督教女子青年會と農村進出

工場に働いて居られる女工さん達のお友達として、何かの奉仕がし度いとお友達として、何かの奉仕がし度いと

は小金井其他の處女會との聯絡、御殿場處女會との聯絡等でした。このクリスマスには特にこの爲めの

て製糸業が現状を切り抜け、岡谷の數萬の女工

保證されるであらうか。岡谷地方の或る人々は萬圓の縣債に依り、今年中位は岡谷の工場も動らうと將來を語らぬ。又或従業員は日一日と深く工場生活の不安を何に依つて、取り除く事が

出来るであらうかと自己の生活苦より訴へてゐる。

高原の中央線を通り諏訪湖畔に面した一隅に煤煙を以て空を曇らせてゐた從來の岡谷が空は高く澄み、青葉は息づいて唯暗黙の岡谷として製糸業地岡谷の將來に大きな不安の怪石を投じつゝあるのである。(五月三十一日)

女工思想調査概要(二)

労働調査部 廣岡たか

しきつてゐると云ふ事は以前からの問題でしたが出来上ると同時に各種の經濟對策と共に農村に論議される様になりました。毎日の新聞紙上つた農村の實狀が傳へられ、購買上、農村救済て疲弊しきつた農村を生かすべきか論ぜられ

査した女工の六七・八%即ち半数以上が、農事を主としてゐる家庭から工場に送られてゐるのであります。商業を業としてゐる家一三%。工業を主としてゐる家庭、五・五%。漁業を営んでゐるもの〇・三%を數へますが、何れも農村、漁村から出てゐるものと見られます。そして彼女達の年齢はと云へば、小學校卒業後すぐ工場に送られてゐるのであります

御宅を拜借し、東京女子青年會のロー女史の應援を得て、卅名近くの村の娘さん達と楽しくクリスマスをやる事が出来ました。外國のひと親しく話したり遊んだりした事のない娘さん達が不思議さうに穴のあくほど、ローさんのお顔に見入つたなど、ローさんには御氣毒でしたらうが、同氏を通して深く女子青年會の事が印象づけられた事を考へ、今後の働きにほんとによいきつかけをつけて下さつたと感謝して居ります。

第三は東京基督教女子青年會の國領に於けるクリスマスで、少女部の責任で村の子供さん達と楽しく神を讃へ共に遊ぶのであります。プログラムの詳細は伺ひ洩しましたがいづれ御報告のある事と思ひます、同盟より廣岡たか子氏應援に行かれました。

第四は國領と同じ日の二十四日御殿場、富士岡村のクリスマスでございます。富士岡村の人々とはほんとに親

女性運動史の資料としても 山口 光朝

日本は、日清戦争から日露戦争にかけて、大きな時代の変わり目を経験した。大国という自負が出てくると同時に、後進的というコンプレックスも持ち合わせていた。日本人の国民としての意識にもそれが反映して、服従型の臣民意識に大国民意識が加わってくる。日本YWCAが誕生したのは、ちょうどそのような時期であった。

日露戦争開戦後の一九〇四（明治三七）年五月一〇日に発行された『女子青年界』の前身である『明治の女子』創刊号（第一巻第一号）は、冒頭に詩篇その他の聖句を引用して「高きに登れ」と題し、高い理想を仰ぐことが日本国民多数の今日の急務だといっている。注目に値するのは、同誌が聖書研究のための月刊誌として刊行されたとはいえ、いずれの号も日露戦争という当時の国民の最大関心事に全く言及していないことだ。このことは、当時の日本のキリスト教界が、概して戦争に肯定的・協力的で、義戦論ないし主戦論の立場をとっていたのとは対照的である。すでに結成されて活躍中のYMCAもその例外ではなかった。YWCAの創立委員会が聖書研究を重視して、YWCAが正式に結成される以前から研究誌を発行しつづけたことも、きわめてユニークである。

YWCAが発足以来、平和問題や女性問題とのかかわりにおいていかに活躍してきたかを知ることには、わが国のキリスト教青年運動の歴史のみならず、女性運動全般の歩みを知るためにも不可欠である。

本誌が明治・大正・昭和にわたる日本の近・現代史研究のための貴重な史料であることはいうまでもない。（故人）

先達の誠実な歩みを辿る 関屋 綾子

この度、YWCA機関誌『女子青年界』の復刻版が出されることは、大変今日の意味のあることと思う。一九〇四（明治三七）年五月より一九五〇（昭和二五）年一二月までに亘り、日本の国が歩んだ歴史の日々が、社会の様様な事象を取り上げながら、キリスト教思想を基盤として記されている。真に興味尽きぬものがある。

当時の日本女子基督教青年会創立委員の中には津田梅子氏、佐藤錦子氏、河井道子氏等、当時の婦人の指導的立場の第一人者の名前が、海外よりの指導者に互に見られる。また、大隈重信、新渡戸稲造、山室軍平、久布白落実、田川大吉郎等、当時の様々な社会的階層に亘り、誠実高邁な識見をもつ人々が、国の現在及び将来に対することをを寄せている。当時の日本の社会状況の中で、真に国の将来を想い、如何に生きてゆくべきかを世界サイズで考えた人々がいたのである。

その頃日本社会の中の男女の問題は当然立ち向かい改善すべき多量の事があつた。しかしどこかで両者が遠い一つの星をそれぞれの立場にあって見つめる想いをもっていたように感じる。現在男女格差の問題は当時よりはるかに先鋭化している。通るべき一段階であるが、遙かな星を共に見つめる心を失ってはならない。今の時を誠実に生きようとする者にとってその意味でも、豊かな良識を持ちつつ、ひたすら歩んだ先輩たちの声を聞くことは、まことに意味深いことだと思う。

（世界平和アピール七人委員会委員・元日本YWCA会長）

女性史研究の幅を広げる 水田 珠枝

YWCAの八〇年史『水を風を光を』（一九八七年）には、今世紀初頭の設立の経緯から、機関誌の発行、女学生のための寄宿舎設置運動、女工や看護婦、職業婦人への働きかけ、関東大震災での救援活動、第二次世界大戦での苦しい時代を経て、戦後の平和・反核運動へいたる足跡が描かれている。日本の女性史といえば、青鞥社運動、婦選運動、社会主義運動を思い起こしがちだったわたくしは、キリスト教に支えられ、国家権力にとらわれない女子教育、女性の労働・生活の改善という地道な活動に取り組んできたその努力に、新鮮な驚きを感じた。

この度、当初から一九五〇年までの機関誌『明治の女子』『女子青年界』『女性新聞』が復刻されることになり、YWCAの活動を当時の文書によって知ることができるようになった。この資料は、世界にネットワークをもつこの組織が諸外国からどのような刺激と情報を受けたか、ほぼ二〇世紀の全体を通じて組織を維持し活動を続けてきた息の長さの秘密は何か、を語ってくれるであろう。そして何よりも、日本の女性史研究の幅を広げ豊かにしてくれるに違いない。

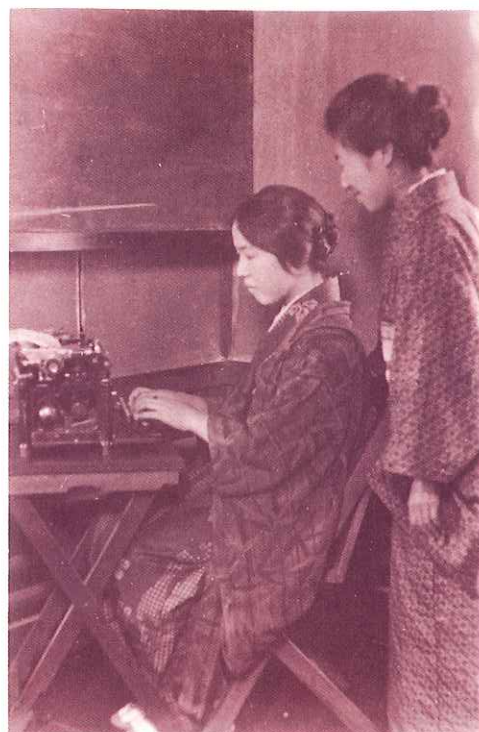
（名古屋経済大学教授）



神田駿河台の本部事務所で、『女子青年界』の発送(1923年4月)



京都YWCA・洋裁のクラス(1922年)



東京YWCA・タイプのクラス(1920年)

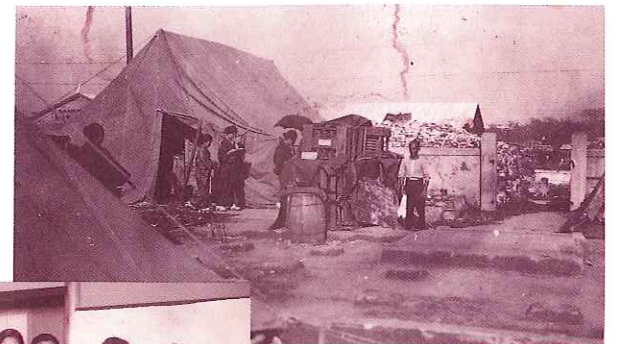


東京YWCA・体育館でのダンスクラス(1920年)

『女子青年界』(前身誌『明治の女子』も含む)執筆索引

あ		青田フミ	36-11-38, 36-12-34
		青柳竜子	24-5-16
		青柳やす子	29-7-8
アーノルド, エドキン(アルノルド, エドウィン)		青山はん子	5-5-52
		青山英子(青山ヒデ子, 青山英)	
			11-3-44, 11-6-44,
R・K	25-6-26		12-2-44, 12-3-45,
I	32-8-24		13-9-45, 14-1-45,
I	36-8-9-35		14-4-41, 14-9-45,
I	38-2-28		15-3-8, 16-1-40,
相内喜代子	39-8-9		22-10-56
I S	18-12-12	青山ゆき子,	15-6-20
相川 睦	17-9-39	青芳勝久	19-12-7, 20-4-4,
あい子→袖山愛子			23-5-20, 29-11-1
相沢けい子(相沢けい, 相沢慶子)		赤井志津子	37-5-24
	21-9-41, 22-7-56,	赤石義明	28-7-4, 30-9-2
	22-12-33, 23-1-23,	赤尾初稔(赤尾はつね)	
	29-1-22, 31-2-7,		10-9-41, 11-3-43
	32-1-8, 33-3-8,	赤木茂枝	14-1-32
	34-7-42, 36-6-19	赤木芳子	21-8-46, 22-1-38,
相田喜代子	38-2-36		27-1-14, 35-10-4,
相原栄子	16-8-46		37-8-14, 38-5-24,
アインシュタイン, アルバート			39-1-6
	28-3-26	赤羽修子	15-3-16, 15-4-32
青木綾子	24-6-40, 25-7-42	赤星仙太	11-8-47
青木 京	28-8-26	赤松克磨	26-8-8
青木澄十郎	14-8-5	赤松常子	35-3-20
青木はな子	16-11-22	アキスリング(アキスリング, ウイリヤム)	
青木節一	23-8-20, 24-7-19		17-4-12, 19-9-18,
青木正子	28-6-24		

(1)



東京YWCA・関東大震災の直後
(1923年9月)



名古屋YWCA・友の家での女中さんの
クリスマス(1933年12月)

自由で快活な精神

笠原 芳光

『明治の女子』の第一巻一二冊を読んでおどろいた。一九〇四(明治三七)年五月の創刊号から翌年四月まで、時あたかも国民あげて熱狂した日露戦争のさなかである。にもかかわらず、戦争に関する言及はまったくない。いや、僅か一行だけある。「日露戦争を開く不幸に会することなかりせば」。この団体がいかに時局から自由であったかが窺える。その後の日中戦争や太平洋戦争では国策への協力もあったが、今日のYWCAは非戦思想の範を、この草創期の機関誌に求むべきだろう。大正時代に入ると『女子青年界』と改題されたが、誌上には新渡戸稲造や山室軍平といったYWCA外のキリスト者、さらに秋田雨雀や鶴見祐輔などキリスト者でない人々の寄稿もある。そのうえ小説や詩歌や文芸評論も載っていて楽しい読物になっている。キリスト教が狭量ではなく、自由で快活な精神であった時代の姿である。

(京都精華大学名誉教授)

真髓をふまえた活用を 一番ヶ瀬康子

日本社会の近代化のなかで、人間の尊厳をめぐって学び、かつ実践してきた人々の多くは、キリスト者に求めることができる。そのなかでも、とくに封建時代にきびしい差別を受け、近代にはいり自らがめざめた女性の多くはキリスト者であった。そのあたかも証しのようなYWCAの機関誌がこの度復刻されることは、日本の女性史にとって、まことに意義深いものである。多くの女性の先駆者の歩み、そしてその人間の尊厳へのためのきびしい実践のなかから結晶した珠玉のような論稿が、多く盛りこまれているからである。とりわけ女子教育、社会福祉の歴史研究のためにも注目すべき論稿が少なくない。また、これらの活動のよき理解者としてさまざまな援助をした男性たちの論稿のなかで、いままで知られていなかったものも多く散在している。多くの人々に、その真髓をふまえた活用がなされることを期待したい。

(長崎純心大学教授)

